

「ミデルブルフ市役所訪問」

ミデルブルフ市庁舎は、15世紀の美しいゴシック建築で、主要部分はベルギーの有名な建築家・ケルダーマンス家によって、1452年から1458年にかけて建てられた。その外観は、オランダとゼーランドの公爵と伯爵の像で、豪華で見所の一つ。庁舎前のマルクト広場の朝市の賑わいと、その中心に全長1キロメートルの環状道路があり、この環状道路の周辺には、大修道院とゼーラント博物館、商店街などがあり、ミデルブルフの黄金期を感じることができた。

また、市庁舎においてのミデルブルフ市主催による歓迎レセプションは、長崎市とミデルブルフの永い交流の歴史が感じられた。



ミデルブルフ市庁舎前

「ヴォスロール村姉妹都市記念式典」

ヴォスロール村のベノア・デムラン村長をはじめ多くの村民の皆様の歓迎を受けるとともに、今後とも、ド・ロ神父で結ばれたヴォスロール村と外海町との姉妹都市は、合併後、長崎市に引き継がれることになったが、姉妹都市憲章の確認書署名、植樹式、ミニ日本庭園テープカット、平野武光ホール開所式等の行事について、ヴォスロール村の人々の心温まるおもてなしに対し深く感動いたしました。

「ポルト市長による歓迎レセプション」

ポルトガルと日本の交流は、偶然の事故によって始まった。3人のポルトガル商人を乗せた明国船が種子島に漂着したのが、1543年。領主種子島時堯は、彼が携えていた武器に注目し、2丁を購入した。これが鉄砲の伝来である。折しも、日本は戦国時代であり、この新兵器はたちまち各地で量産されるようになった。

ポルトガルの商船が初めて平戸に入港し、日本との貿易が始まった。16世紀後半にポルトガル船が入港することにより、長崎の港は世界へと開かれるきっかけになった。

このように、永い歴史を振り返り、1978年に姉妹都市提携を行い、ここに30周年の記

念すべき年を迎え、ポルト市、長崎市の絆を深め、協力関係を結ぶことに深い感銘を受けた。

「ユネスコ本部訪問」

長崎の被爆天使像を視察し、その後、松浦事務局長の表敬を行った。

まず、長崎の教会群とキリスト教関連遺産の世界遺産登録に向けて取り組みを行っているので、今後とも、ご支援とご協力をお願いしたいことをお伝えした。

また、世界遺産登録については、文化遺産と産業遺産によって取り扱いが違うこと、岩手県「平泉」、島根県「石見銀山遺跡」の世界遺産登録等についての話などを賜り、大変有意義であった。

今回の姉妹都市提携 30 周年記念公式訪問団は、市民・議会・行政一体となった行事であり、参加された市民の方々も大変有意義であったと思う。今後とも、このような行事を行ってほしいとの要望もあり、姉妹都市交流がいかに大切であり、お互いの相互理解と信頼が得られたかを実際に参加して認識し、このことは大変意義深いことであると思った。